

令和元年6月21日現在

機関番号：34412

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K21303

研究課題名（和文）逐次通訳における意味機能の制御と推論操作の緊張関係に関する基盤研究

研究課題名（英文）Basic Study for Semantic Constraints and Inference in Consecutive Interpreting

研究代表者

南津 佳広（Minamitsu, Yoshihiro）

大阪電気通信大学・共通教育機構・准教授

研究者番号：70616292

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、人間の言語処理において推論操作にどのような意味論的制御をかけるのか、ノート・テーキング付の逐次通訳手法を利用して研究を行った。通訳経験が10年以上のプロ通訳者9名に英日語間の逐次通訳を行ってもらった。一方、ノートテーキングを用いたスピーキング練習を行い、語用論的処理がどの段階で言語的制約と推論的制約を受けるのか分析を行った。その結果、語用論的処理が語彙概念の制約を受けるか否かで処理の段階に差が生じることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、発話解析においてsaturationやfree enrichmentなどの語用論的処理がどの段階で行われているのか、プロセスを分析した。これまで理論的な検証が行われているが、実際のプロセスを検証された研究はまだ数が少ない。本研究が用いたのはノートテーキング付きの逐次通訳である。通訳とは原発言者の意図をそのまま伝えることが求められる。その中でノートテーキングは、通訳者の発話処理と訳出プランの双方を可視化させるものであり、これまで触れられてこなかった言語処理のプロセス分析の一部を解明することに可能にするものである。

研究成果の概要（英文）：This research aims to see what kind of semantic and pragmatic constraints should be imposed to inference in human language processing by using a consecutive interpreting with note-taking. The research conducted an experiment in which 9 professional conference interpreters with over 10 years of their experiences did consecutive interpreting between English and Japanese. The research also conducted speaking practices using the consecutive interpreter's note-taking method for students who learn to make monologue speeches. Then the study analysed at what stage interpreters and speakers did the pragmatic processing, including saturation and free enrichment. As a result, it became clear that the stage of processing depends on whether the pragmatic processing is restricted by lexical concept or not.

研究分野：通訳学

キーワード：逐次通訳 推論操作 語用論的制約

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

通訳学では、Herbert(1952)が本人の経験則から逐次通訳では「スピーカーの原発言を5分間聞いてメモを取り、その情報量を75%に圧縮して訳出する」方式を打ち出し、現在の逐次通訳の基本方式として大きな影響を与えている。その後の通訳研究では、逐次通訳の理論的研究が殆どなされていない。ノート・テーキングにて、略語を用いて構造化してメモする7つの技法を提唱した Rozan(1956)をはじめ、(1968)や Matyssek(1983)、Johnes(2002)、Gilles(2005)など国外・国内では、逐次通訳の技術論が繰り返し展開されてきた。そこでは、「何を」、「何語で」、「どのように」メモすると、安定して通訳が出来るのかとの議論がなされているが、逐次通訳を可能にする基盤となる発話処理能力を議論している研究はほぼ無い。

通訳の本質は、原発言が伝えようとする意図をすべて、またそのみを再現することにある。逐次通訳についても同じことが言える。既存の逐次通訳研究では、「ノート・テーキングの技術を支える能力は何か」という視点からは研究が行われていない。ノート・テーキングの基盤となる能力、つまり、異言語間の発話処理の実態を明らかにしない限り、技術についての議論をいくら繰り返しても、逐次通訳研究は、理論的根拠を持たない直観的かつ経験的で非体系的なものにとどまらざるを得ない。また、ノート・テーキングは、通訳者がスピーカーのメッセージを理解し、そのメッセージを訳出言語でできる限り忠実に再現するために不可欠な装置である(Albi-Mikasa(2008)、Matyssek(1983)、Johnes(2002)、Gilles(2005)、(1968)、Rozan(1956)、南津(2011)、南津(2014)、友野・宮元・南津(2012))。通訳者が聴きながらメモする同時並行作業を鑑みるなら、ノート・テーキングは通訳者の「スピーカーのメッセージの理解を反映したものであり、通訳者の概念形成を可視化したものと位置づけられる(南津2014)。左図のように、ノート・テーキングは一見アトラランダムに書きなぐられているように見えるかも知れない。しかし、適切な理解に裏付けられた通訳では、視覚的な見やすさと訳出言語での復元可能性を考慮に入れ、通訳者個人の経験と嗜好から、略語・記号等を駆使して、通訳者が理解したスピーカーのメッセージを構造化している。

### 2. 研究の目的

本研究では、ノート・テーキング付きの逐次通訳において、原発言と訳出に「ずれ」が生じていてもメッセージを伝達している箇所に焦点を当て、「ずれ」が生じる要因を意味機能の観点から分析を進める。特に考察をするのは以下の3点である：(a) 通訳者がノート・テーキングで表記する語彙概念の断片は、意味機能上どのような制御をかけているのか。(b) ノート・テーキングでの表記内容を手がかりに、どのような推論操作を行っているのか。(c) 既存の認知語用論が提唱している推論操作は、単一言語間の発話処理に限定されているが、異言語間の発話処理でも同ことが言え、一般化することができるのか。

### 3. 研究の方法

単一言語のコミュニケーションにおいて提示されてきた発話解釈における意味機能の制約と推論操作の緊張関係は、異言語間のコミュニケーションでも、同じことが言えるのかを検証することにある。そこで、本研究では経験が10年以上の現役の会議通訳者を対象に、ノート・テーキング付きの逐次通訳の実験を行う。実験では、逐次通訳のプロセスを録音・録画した。その上で、異言語間での発話処理の実態を検証した。その後、各協力者に対してインタビューを行い、通訳者が独自に訳出した箇所に関する実験協力者による内省データを収集した。

実験で検証するのは英 日語間の逐次通訳である。英語は日本語と文法機能と視点の置き方が異なるため、異言語間の発話処理の実態の一端を明らかにする素材としては充分魅力的と言える。その上で、原発言とノート・テーキングの内容、訳出の3つを比較し、上述したように、(a) 通訳者がノート・テーキングで表記する語彙概念の断片は、メッセージの解釈にあたり、どのタイミングで意味機能上どのような制御をかけているのか。(b) ノート・テーキングでの表記内容を手がかりに、どのタイミングでどのような推論操作を行っているのか。(c) 現行の認知語用論が提唱している推論操作は、単一言語間の発話処理に限定されているが、異言語間の発話処理でも同ことが言え、一般化することができるのかについて考察した。

また、同時にプロの通訳者ではない学部生の英語コミュニケーション系の授業において、逐次通訳のノート・テーキング手法を導入して、上述した(a) 通訳者がノート・テーキングで表記する語彙概念の断片は、メッセージの解釈にあたり、どのタイミングで意味機能上どのような制御をかけているのか。(b) ノート・テーキングでの表記内容を手がかりに、どのタイミングでどのような推論操作を行っているのかについても分析を行った。

### 4. 研究成果

逐次通訳者がどのように原発言を聴取・分析してノート・テーキングの際に表記するのかについて考察を行ったところ、表記内容・表記方法に関しては、通訳者は原則的に原発言の言語形式をもとに最小命題を作り、その最小命題を構造化して表記していることがわかった。

ところが、訳出局面では、原発言やノート・テーキングでの表記内容とは異なる訳出をしてい

る箇所が出てくる。その中には、通訳者が表記内容を手がかりに語用論操作を行い、認知語用論の枠組みで言う表意を作り出して、聞き手にあわせて訳出していると考えられる。

ここでいう表意とは、当該の発話の言語使用状況の中で作り出されたその発話の意味である。つまり、言語形式から得られた意味概念を元に、語用論的操作を行い、当該の状況で聞き手にとって関連があると認められた解釈が得られた段階で語用論的操作を止めた結果産出されるものである。この語用論的操作には、曖昧性除去、アドホック概念構築（当該状況に見合うように調整されたその場限りの概念）、飽和化、自由拡張の4種類の操作が行われる。聞き手にあわせて訳出を行うことを考えれば、の曖昧性除去とアドホック概念構築は、通訳行為では自明のことと言えよう。本研究で取り扱うのはの飽和化との自由拡張である。

そこで、の飽和化との自由拡張に焦点をあて、通訳者がノート・テーキングでの表記を手がかりに、どのように語用論的操作を行い、訳出しているのかを観察・分析した。

飽和とは、語彙概念の制約を受けて、当該表現のそのスロットに文脈情報補い、表意を構築するプロセスである。

[SL] I think it's time we tried to stand on our own and I've been very grateful to the United States for what they've done to help the forces of democracy.

[TL] もうそろそろビルマが自分の足でしっかりと立てるようになるべきだと思います。アメリカには大変感謝しております。民主化プロセスを進める上で、制裁は役に立ったと考えております。

この“What they've done”は“what they, have done,”のように、they と done に語彙概念にスロットがある。通訳者は文脈を手掛かりに、“they”のスロットに対してはアメリカを充てることで満たしている。後者の“done”の場合、2003年にアメリカが対ミャンマー制裁法を制定したことを当該の通訳者は知識として獲得していたのであろう。そこで、“done”のスロットに對ミャンマーの経済制裁を充てたとみられる。通訳者はノート・テーキングでも「制裁」と表記し、そのまま訳したと考えられる。このように、飽和についてはノート・テーキングの段階で既に語彙概念のスロットに語用論的操作を加えて記載している傾向が高いことが分かった。

自由拡張は、飽和とは異なり、純粋な語用論操作である。ここでは、語彙概念の制約を受けることなく、聞き手自身が文脈概念から情報を付け足すことによって、表意を構築する作業である。

[SL] “Political and economic reforms in Burma are clearly not yet complete. What needs to happen next? We need to just go on with the process. We need to find out what we have to do in order to keep the democratization process on track.”

[TL] このプロセス...現在のプロセスを続ける必要があります。何をすべきか、模索する必要があります。で、民主化の動きを軌道に乗せるということです。

この語彙概念では、冒頭から出ていることを考えるなら、“the process”の語彙概念のスロットに何を埋めるべきか、この時点では曖昧である。さらに、通訳者に文脈情報は何も提供されていない。したがって、通訳者は、ノート・テーキングでは“process”と表記して、「このプロセス...現在のプロセス」と、「この・現在の」を付け足し、“process”が持つ、特定の対象への言及を含まない意味表示を膨らませることで、解釈を聞き手に委ねて訳出している。このことから、訳出局面では逐次通訳者はSLの語彙概念の制約と通訳ノートの表記をもとに語用論的操作を行って訳出していることが明らかとなった。このように自由拡張では、ノート・テーキングでの表記を手がかりに訳出していることが分かった。

通訳ノートを用いる逐次通訳の実験を行って、ノート・テーキングの表記のタイミングと内容・訳出を比べたところ、(a) 通訳者がノート・テーキングで表記する内容は、語彙概念の制約を受けざるをえない場合には既に制約を受けた結果を表記している可能性が高く、(b) ノート・テーキングでの表記内容を手がかりに、語彙概念の制約を受けない語用論的操作についてはノート・テーキングにて表記したのちに自由拡張の語用論的操作を行っている可能性が高いことが分かった。

これまで通訳者個人の直感と実務経験から得られた略字や記号を用いると述べられてきたノート・テーキングでの表記内容・表記方法は、通訳者が聴取した原発言の一般的な概念表示に動機づけられた意味論レベルの処理段階であると主張してきたが、語彙概念の制約を受ける語用論的処理を行っている段階でノート・テーキングを行っていることが明らかとなった。

また、ノート・テーキングを用いた逐次通訳研究は、人間の言語理解だけではなく発話の産出局面にも応用可能である。なぜなら、これまで意味論や語用論で記述されてきた、人間が聴取・理解した概念表示をノート・テーキングの表記によって可視化すること出来るからである。そこで、ノート・テーキングを導入することによるモノログ・スピーチの産出練習を、学部レベルの英語科目で実践し、分析した。ノート・テーキングを導入することで、学習者が詰まらずに話し始める点は改善された。また、センテンスの構成を全てメモしなくても、想起可能な簡単な文形式で話そうとする割合は増えた。ところが、文形式ですぐに話し始めることを優先し時制、冠

詞など文法的特性への意識は後回しにしがちであること、ノート・テーキングをする際にセンテンスの切れ目をマークするのを忘れて、センテンスの構成する要素が欠けることでセンテンスが成立していないことが明らかとなった。一方、逐次通訳のノート・テーキングの訓練手法を導入することのデメリットも挙げられる。まず、独特なメモの表記方法を習得するのに時間がかかることである。また、学習者は表記する速度はなれると早くなるが、表記内容から英語へ訳すこと、つまり表記内容を見ながら英語を想起して話すまでにはどうしても時間がかかり、ノート・テーキングを導入することでむしろ fluency を阻害している可能性も挙げられる。これはまた別の機会に検討したい。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

(1) 南津佳広・杉村寛子・松田正貴・上垣公明(2019)「文学と通訳の公開教養講座開催の報告」『人間科学研究 21』大阪電気通信大学 (pp.131-141) 査読あり

(2) Yoshihiro Minamitsu (2018) "Interpreting and Human Inferential Processing" 『人間科学研究 20』大阪電気通信大学 (pp.49-65) 査読あり

(3) 竹野純一郎・松田雅子・南津佳広・ジュディス三上 (2016)「音声訓練とオリジナル・スピーキングサイトの開発」『中国地区英語教育学会紀要』No.46 全国英語教育学会 中国地区 (pp.131-140) 査読あり

〔学会発表〕(計7件)

(1) 南津佳広・杉村寛子「TILTによる訳出をめぐる語用論的プロセス分析と論理的思考力の涵養」2018年11月30日 第47回九州英語教育学会鹿児島研究大会(於:鹿児島大学)

(2) Yoshihiro Minamitsu "Promoting Fluent Language Production through the Method of Consecutive Interpreting" 2018年10月14日 The 26th Korea TESOL International Conference 2018: Focus on Fluency (at Sookmyung Women's University, South Korea)

(3) 南津佳広「逐次通訳訓練手法はモノログ・スピーチ産出の訓練にどこまで貢献しうるか」2018年9月15日 日本メディア英語学会第126回西日本地区研究例会(於:佛教大学)

(4) 南津佳広「シンポジウム『教育と翻通訳~どのメディアをいかに教育に応用するか~』」2018年9月15日 日本メディア英語学会第126回西日本地区研究例会 コーディネート(於:佛教大学)

(5) 南津佳広「通訳訓練手法を応用した即応的なスピーキングの実践報告」2017年12月2日 第46回九州英語教育学会沖縄研究大会(於:沖縄国際大学)

(6) 南津佳広・松田雅子「包括的な技能統合型教養英語プログラムの構築」2015年10月11日 日本メディア英語学会 第5回年次大会(於:大阪府立大学 I-site なんば)

(7) 竹野純一郎・松田雅子・南津佳広・ジュディス三上「音声訓練とオリジナル・スピーキングテストサイトの開発」2015年8月23日 全国英語教育学会第44回 熊本研究大会(於:熊本学園大学)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。